

自 己 評 価 表

愛媛県立松山東高等学校 No.1
学校番号(20)

教育方針		1 高い知性と豊かな創造性を身に付け、新しい文化の発展に貢献する人間を育成する。 2 高い道義心と公正な判断力を身に付け、人類の福祉増進に寄与する人間を育成する。 3 たくましい気力・体力を身に付け、平和な国家社会の実現に努力する人間を育成する。	重点目標	生徒を励まし可能性を広げ、地域の負託に応える教育の実践 ー徹底した個人指導から、さらなる高みへー ＜育てたい人物像＞ ○自己を鍛え、困難に打ち勝つ力を身に付けて社会に貢献できる人材 ○個性を伸ばして、自他ともに尊重し、支え合うことができる人材 ○輝かしい伝統を受け継ぎ、新たな創造を切り拓く、グローバル社会で活躍できる人材 ＜生徒に身に付けさせたい力＞ ○高い志を持ち、自らを律して粘り強く努力する力 ○相互に思い遣る心を持って自他ともに高め合う力 ○世界的視野を持って考え、行動できる力	
領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
学校経営	教育目標達成のための実践	本年度の重点目標の達成に向け、創意工夫しながら実践に励む。面接週間も活用しながら、担任による個人面談を1、2年生一人年間10回以上、3年生一人年間15回以上を目指す。 A:10回以上 B:9回 C:8回 D:7回 E:6回以下 A:15回以上 B:14～13回 C:12～11回 D:10～9回 E:8回以下	1,2年 C 3年 C	1、2年生は8.0回で前年比0.9回の増、3年生は12.5回で前年比3.8回の増となっている。また、教職員対象のアンケートにおける「生徒との面接機会を多く作るよう努めている」の項目は8.3ポイントで前年比0.3ポイント増となっている。担任だけでなく、多くの教職員が、生徒への声掛けや励ましを行っており、数値以上の実践が行われていると考える。	来年度も面接週間を活用しながら、担任による個人面談などを通して、声掛けや励ましを継続していきたい。また、多様化する生徒に対応するため、多くの教員が生徒に関わるようになっていきたい。
	働き方改革に対する教職員の意識改善	目標チャレンジ制度を活用し、幸福感を伴う働き方について意識を高める。自己評価において、評価の平均値が3.3以上となることを目指す。 A:3.5以上 B:3.3～3.4 C:3.1～3.3 D:2.9～3.0 E:2.8以下	A	上半期の自己評価の平均値は3.8で前年比0.2の増となっている。各自が設定した目標を、ほぼ達成できている。	業務に対する達成感を高め、幸福感を伴う働き方についての意識を一層高めていくため、来年度も、業務の精選や効率的な遂行、協力・連携体制の強化に取り組んでゆく。
	円滑な組織運営	業務の精選と情報の共有を図り、連携協力しながら自己の評価ポイント平均8.5以上を目指す。 A:8.5ポイント以上 B:8.4～8.3ポイント C:8.2～8.1ポイント D:8.0～7.9ポイント E:7.8ポイント以下	A	教職員対象のアンケートにおける「校務分掌において、他との連携協調して自分の役割を果たしている。」の項目は8.6ポイントで前年比0.3ポイントの減である。高い評価ポイントを維持しており、連携協力が果たされていると考えている。	業務の精選を更に進めるとともに、ICT機器を活用した情報の共有化を一層図る。また、管理職を中心としながら、各課・科・学年の協力体制を強化していく。
	施設設備の安全管理の徹底	施設設備の安全点検を定期的に行い、保護者アンケートの当該項目に関する評価7.5以上を目指す。 A:7.5以上 B:7.4～7.2 C:7.1～6.9 D:6.8～6.6 E:6.5以下	A	緊急を要する修繕については、速やかに対応した。保護者アンケートの「学校の施設・設備は、便利さや安全などに配慮して整えられていると思いますか。」の項目で7.9ポイントあり、設定した目標をほぼ達成できたと考える。	継続して、施設設備の安全点検を定期的に行うとともに、日頃から教職員と情報共有し、限られた予算の中で安全安心な教育環境づくりに努めたい。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

自己評価表

愛媛県立松山東高等学校 No.2

学校番号(20)

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
学習指導	家庭学習の充実	1、2年生は180分以上、3年生は330分以上の家庭学習習慣を形成し、主体的に学ぶ力を身に付ける。 A：180分以上 B：160分以上～180分未満 C：140分以上～160分未満 D：120分以上～140分未満 E：120分未満 A：330分以上 B：310分以上～330分未満 C：290分以上～270分未満 D：270分以上～290分未満 E：270分未満	B	第1回～第4回(3年生は第3回まで)の家庭学習時間調査の結果は以下の通りである。 1年生は第2回の調査期間の達成状況がAで、残りの期間はBであった。 2年生文系はAを達成したのが1回、Cが1回、Dが2回であった。2年生理系はAが2回、Bが1回、Cが1回であった。 3年生文系はAが1回、DとEが1回ずつであった。3年生理系はAが1回、CとEが1回ずつであった。	今年度の家庭学習時間目標達成状況から以下のことが分かる。 1 1年生の目標達成状況が最も良好である。入学してからの緊張感、学習意欲が1年生の間は維持できているようである。 2 上記のような学習意欲を2年次にも引き続き継続させるための工夫や取組が必要である。 3 3年生は夏からの受験態勢スタートが定着しているようだが、受験時にスパートをかけられるだけの土台作りという意味でも、2年次の過ごし方が鍵である。 4 2年生、3年生とも理系の方が家庭学習状況がやや良好である。文系科目での課題の種類や与え方など、各教科で検討したい。
	教科指導の充実	授業公開週間や各教科の研究授業、教科会等の機会を活用し、お互いの取組を共有し、各教員の授業力向上を目指す。	A	7月と11月に設けた授業参観週間や、授業公開日、研究授業等の機会を活用して、お互いに授業を参観し、授業力向上の一助とすることができた。	生徒が授業者となる国語科の「こころ」と「舞姫」の授業が好例だが、各教科に特徴的な取組があると、教科内で授業に関して話し合う機会が増え、各自の授業力向上につながると思われる。そのような可能性を探ってきたい。
生徒指導	交通安全指導の充実	学校と保護者・地域の方々との連携を深め、安全通学への啓発活動を積極的に推進していくとともに、交通ルールの遵守とマナーアップの向上を図る。特に「自分の身は自分で守る」の教訓を生かし、年間の交通事故の件数を15件以下にするよう指導する。	B	校外から交通マナー(自転車通学のマナー)についての指摘は大幅に減少したが、交通事故の件数については、16件で目標を上回ってしまった。大事故にはならなかったが、交差点での接触事故は多い。事故処理は、適正にできていた。	交差点での事故を減らすために、交通自治委員によるマナーアップ活動を行い、一時停止・徐行など交通規則の順守を徹底させ、事故件数を15件までにしていきたい。また、自転車のみならず公共交通機関での乗車マナーなど社会に適應できる人間としての意識を高める教育を推進したい。
	基本的生活習慣の確立	集団生活に必要な規範意識の向上を図り、自律する能力を培い、基本的生活習慣をより一層自分に合ったものにできるよう具体的な行動目標を設定し、実行させるよう指導していく。1か年皆勤率を60%以上とし、10分前行動の徹底を図る。 A:60%以上 B:59%～55% C:54%～50% D:49%～45% E:45%未満	B	8:15を過ぎて登校する生徒が減少するなど、基本的生活習慣が身に付いてきたように思われる。しかしながら、まだ十分とは言えず、今後、より一層の指導が必要である。	基本的生活習慣について考える機会を持たせ、登校時刻を5分早くするなど、時間にゆとりが持てるよう家庭に協力を要請する。「朝の読書」時には、全員が登校できているよう指導をしていきたい。身だしなみ等の自律については、生活自律週間において、各HRを利用して、意識を高める指導をしていきたい。
進路指導	進学指導の充実	東大、京大等の国立難関大学、国公立大学医学部医学科の合格者数80名以上 A:80名以上 B:79～70名 C:69～60名 D:59～50名 E:49名以下 (現役生の合格者数では、国立難関10大学50名以上、国公立大学医学部医学科10名以上を目指す)	A	東京大学の合格者数は9名、京都大学の合格者数は7名であり、国立難関大学と国公立医学部医学科の合格者は、合計91名である。難関大合格数は91名である。また、現役生の合格者数は国立難関10大学58名、国公立医学部医学科9名と、コロナ禍での高校3年間の生活という状況を考えてよく健闘した。一人一人がしっかりと高い目標をもって、第一希望に出願した結果であると考えられる。	二次力向上に向けて、基礎基本の定着を図り、早期に国数英の学力の向上に努める。そのために、1・2学年における弱点教科の学力向上を行う。教科や学年など教員の組織力を高め、常に二次の学力強化を意識して指導する。生徒には「受験は団体戦」という意識を持たせ、高い目標を持った集団として学力の向上を図る。 1年次から、松山東高生であることを自覚させ、基本的生活習慣をしっかり確立させるとともに、逆境にも負けない強い精神力を育成する。さらに、状況に応じて、個に応じたきめ細やかな指導や面談を行い、目標を高く持たせて、その目標を必ず実現するという強い意志、絶対にあきらめないという気持ちの育成と学習する意欲や態度を醸成させる。
		早稲田、慶応、上智、関関同立等、私立難関大学延べ合格者数250名以上 A：250名以上 B：249～230名 C：229～210名 D：209～190名 E：189名以下	A	早稲田大15名、慶応大4名、上智大5名、明治大20名、青山学院大14名、中央大7名、同志社大55名、立命館大116名、関西大28名、関西学院大54名など、私立難関大延べ合格者数は346名である。共通テストの平均点上昇、私立大学の入学定員厳格化の緩和とコロナ禍による安全志向など、色々な影響が考えられるが、高い目標と広い視野をもって受験に臨み、一人一人の努力の成果が出た結果と考える。	私立難関大合格者は、国立難関大志望者でもある。目標の難関国公立大の合格に向けて、共通テスト対策では各教科ともバランスのよい学習をさせること、二次試験対策においては国数英の各教科において、論理的思考力を身に付けさせるなど、最後まで目標を高く持って、受験教科を早くから絞らせないようにする。
		国公立大学合格者数250名以上 A：250名以上 B：249～230名 C：229名～210名 D：209名～190以上 E：189以下	B	国公立大学の出願数は、前期345名、後期347名である。コロナ禍での高校3年間の生活を考えると、一人一人がしっかりと目標をもって、第一希望に出願していると考えられる。前期試験合格発表時点で、国公立大合格者数は217名である。現役生は、難関大学をはじめとして、第一希望を譲らないという気持ちでよく健闘した。最終結果が出るまでの健闘を期待する。	入試は団体戦であるので、学校の進路指導方針を徹底し、教員の意識統一のもと、粘り強い指導を継続していきたい。生徒に松山東高生であることを自覚させ、東京大や京大など難関大学や医学部医学科の合格者数を伸ばしたい。また、基本事項を正確に把握し、題意を正しく把握するための読解力を養うなど、基礎・基本の定着に向けて指導を徹底し、岡山・広島大の中堅大学の受験者数・合格者数も増やしたい。「二次力で勝負、二次で逆転」という気持ちを持たせることができる教科指導・進路指導をしていきたい。しかし、共通テストの出題傾向が少しずつ変わってきているので、共通テストと二次試験のバランスを考えた指導も考えておかなければならない。

※ 評価は5段階 (A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった) とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
特別活動	ホームルーム活動の充実	主権者教育など新しい内容を研究し、さらに発展した活動が展開されるよう担任を援助するとともに、生徒の自発的・自治的活動を助長し、より良い人間関係を形成できるホームルーム活動を確立する。	A	各ホームルーム担任の創意工夫と生徒たちのアイデアなどにより、本校の特色を生かした活動が展開された。また、ホームルームでの活動を基本としてより良い人間関係を構築することができている。	計画的かつ系統的な活動が展開されるように、学年主任、ホームルーム担任を支援していきたい。また、成年年齢引き下げによる消費者教育の充実に向けて、人権教育課や地歴公民科との連携をさらに深めていきたい。
	生徒会活動の充実	生徒会執行部の役割を明確にし、さらに自主的な活動ができるように支援していく。そのためにも生徒会役員との連携をさらに深めていく。また、生徒会委員会の活動をより活性化し、生徒主体の活動が展開されるように支援していく。	B	リモートでの集会など、例年と異なる環境の中での活動が増えたが、担当教員との連携をとりながら、積極的に活動できた。また、委員会活動も担当教員の工夫により、主体的な活動がなされている。	対面での活動が徐々に増えていくと思われる。生徒たちの経験も不足しているため、年度当初は特に生徒会執行部のバックアップをしっかりと行い、主体的な活動が引き出せるように支援していきたい。また、特活課だけではなく、様々な部署及び教職員との連携を強化し、生徒会活動を充実させていきたい。
	学校行事の充実	学校行事の特性や狙いを明確にし、本校ならではの伝統的な校風を継承・発展させていく。また、集団の中でリーダーシップやフォロワーシップを発揮させるとともに、マナーアップを図る。そのためにも、生徒が学習活動や部活動とのバランスをとりながら、積極的に取り組めるような支援を行っていく。	A	コロナ禍においての学校行事の進め方を模索する1年であった。様々な制約の中での学校行事ではあったが、教職員や生徒の協力により、充実した活動が行われた。	少しづつではあるが、コロナ以前の形に戻していけると思う。その中でも緩めるところと、引き締めていくところのバランスをとりながら、伝統を継承・発展させていきたい。活動を通し、生徒たちがリーダーシップとフォロワーシップを学び、学校の一員としての役割を自覚し、また、部活動とのバランスに留意し、学校行事に参加しやすい環境を整えるために、部活動顧問とも連携していきたい。
	部活動の充実	学習活動や学校行事とのバランスを考慮しながら顧問と生徒が一体となった「質の高い文武両道の実践」を目指すとともに、総合的な人間力の育成にも重点を置き、毎日の活動を充実させていく。 A: 全国大会出場10種目以上 B: 8種目以上 C: 6種目以上 D: 4種目以上 E: 2種目以上	A	16の部活動で29種目143名(運動部12種目・文化部17種目)が全国大会に出場した。演劇部の日本一をはじめ、入賞も11種目と非常に優れた成果を収めることができた。	本校伝統の「質の高い文武両道の実践」を継承していく。そのために顧問と生徒の意思の疎通を深め、効率的な活動を推進していく。また、本校の「部活動における方針」をもとに、コロナ禍における活動の在り方を工夫し、毎日の活動を充実させるとともに、総合的な人間力の育成に重点を置き活動していきたい。
保健・安全管理	健康教育の充実	生徒一人一人の健康状態を確実に把握し、健康の維持・増進を図るとともに、健康診断結果による事後措置の徹底を図り、心電図・尿検査受診率を上げる。 A100% B95%以上 C90%以上 D85%以上 E85%未満	A	保健調査から抽出した配慮の必要な生徒に個別面談を実施し、確実に健康状態を把握できるようにした。未受診者には保健指導を行い、事後措置の徹底を図った。	保健調査等で配慮の必要な生徒を抽出し、迅速に個別面談を行うことで、生徒の健康状態を確実に把握し、情報共有を図る。また、未受診者には事後措置の必要性を伝え、自己管理能力の向上に努める。
		保健だよりや保健講話を通して保健指導の機会を確保し、自らが自分の健康を管理・改善していく実践力を身に付けさせる。	B	今年度の保健講話は、対面で学年別に行うことができた。保健だよりは保健委員自らが考え作成し、各クラスで情報提供を行った。	生徒や保護者の意見を反映させた保健講話を企画し、生徒自らが自分の健康に興味関心を持つことができるように努める。

※ 評価は5段階 (A: 十分な成果があった B: かなりの成果があった C: 一応の成果があった D: あまり成果がなかった E: 成果がなかった) とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
保健・安全管理	教育相談の充実	月1回定例会で生徒の状況について協議し、学年団と連携して組織的に対応する。学校生活アンケートを学期に1回ずつ実施し、担任の面談・配慮を要する生徒への教育相談担当者の面談を確実に実施する。生徒個人面談週間を年2回設け、個人指導の充実を図る。「教育相談だより」を年間5回発行し、生徒が心身の状況を客観的に見つめ、相談しやすい状況を作る。また、スクールライフアドバイザーからの情報発信を行う。	A	月1回の定例会の協議を踏まえ、生徒の支援を組織的に行った。学期に一度学校生活アンケートを行い、生徒との面談を確実に行った。「教育相談だより」を年間5回発行した。スクールライフアドバイザーからの情報発信を行った。	困りごとを抱えた生徒の増加に対応した校内支援体制の更なる充実を図らなければならない。個別支援のための場所、相談に関する人員の確保が必要である。アンケートの後の迅速な報告・情報共有体制を作り、生徒への支援がさらに的確に行えるよう啓発を続ける。
		特別支援教育校内委員会を通じて校内支援体制を確立し、生徒指導に関する共通理解を図り、年間1回以上職員会において報告を行う。「教育相談だより」を通じて多様性の尊重について啓発する。配慮を要する生徒について迅速に対応する。	A	特別支援教育校内委員会を通じて校内支援体制を確立し、生徒支援に関する共通理解を図り、報告を行った。「教育相談だより」での啓発活動を行った。	引き続きこの体制を維持するとともに、新しい課題に対して柔軟に真摯に対応していきたい。
	環境の整備と美化の推進	ゴミの分別を徹底し、ゴミの削減に努める。ゴミ袋の使用枚数を昨年度より10%減らすことを目標にする。	B	美化委員の啓発により、生徒のゴミの分別に対する意識は高まりつつある。	ゴミ袋の10%削減はなかなか難しい課題であるが、昨年度より微減しており、今後も長期的課題として取り組んでいきたい。
		掃除用具や備品を定期的に点検・整備し、整理整頓をすることで、効率の良い清掃活動に取り組めるようにする。	A	各清掃場所担当教員及び美化委員が定期的に点検しており、必要な時に必要なものを即、補充できる体制ができています。	引き続き、この体制を維持していきたい。
		環境美化に関する意識を高めることで、生徒自らが自主的に清掃活動に取り組もうとする学校を目指す。10分間全力清掃。	B	「清掃開始5分前行動」に課題が残った。清掃活動自体には、ほぼ、全力で取り組んでいる。	清掃場所への移動に時間を要することがある。余裕を持って清掃活動を行うために、それぞれの意識をさらに高めていきたい。
	危機管理の徹底	危機管理マニュアル・防災避難訓練のあり方を各学期ごとに見直し、発災時を想定した地域との連携を図る。また、生徒課をはじめ各課とも連携し、安全な学習環境の構築と安全教育に努めて、災害・事件・事故発生時に迅速・的確に対応できるようにする。	B	危機管理マニュアルの見直し、備蓄品の入れ替え・補充、危険個所のリストアップと補修、避難所開設に関する地域との連携等、学校安全を推進することができた。	危機管理マニュアル・防災避難訓練の在り方を随時見直すとともに、教職員間で知識を共有できる仕組みを作る。地域との連携を図り、防災意識の高揚と安全な学校環境の構築に努め、災害・事故・事件発生時に迅速・的確に対応できるようにする。
人権教育	人権問題学習の充実	「部落差別の解消の推進に関する法律」の趣旨と内容を生徒・教職員に周知徹底させ、人権便りを学期に1回発行する。	B	人権・同和教育ホームルーム活動で「差別解消推進法」を取り上げてもらうことができた。人権便りを各学期に発行できた。	引き続き、この法律の内容理解と課題についての周知徹底を図りたい。
	人権教育研修会の充実	新聞記事を中心に人権に関する資料作成に力を入れ、学期に1回教職員に配布する。	B	人権NEWSとして毎月、生徒用に掲示し、人権委員からの呼び掛けも行ったが、教職員への配布は一部にとどまった。	人権NEWSの教職員への掲示を工夫したい。また、校外研修の報告の充実によって、研修内容の共通理解を図りたい。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
図書活動	読書指導の充実	「朝の読書」の目的を理解させ、読書に臨む意識を高める。図書委員による「読み聞かせ」を学期に1回行い、内容の充実をはかる。読書会を活発にする。	B	図書委員による「読み聞かせ」「読書会」は、定着しており、生徒の主体的な実施ができた。生徒による本の選定(リクエスト)を行い、蔵書の充実を図った。	「読み聞かせ」「読書会」用の本の多様化(英語の本など)を行い、より内容の充実を図る。生徒による本の選定(リクエスト)は継続する。
		啓発活動を継続して行い、一人一か月2冊の読書を奨励し、学校全体で年間20,000冊以上の読書を実践する。 A : 20,000冊以上 B : 19,999冊～18,000冊 C : 17,999冊～16,000冊 D : 15,999冊～14000冊 E : 13,999冊以下	A	達成目標である、年間20,000冊以上の読書を実践することができた。今年度は県立図書館の「まなぼん」を活用したり、渡り廊下に図書館からの案内コーナーを設置した。	年間20,000冊という目標を継続する。生徒の読書活動を推進するため、新着図書やお勧め図書などの案内の方法や、掲示方法を工夫し、読書啓発活動を引き続き進めて行く。生徒端末を利用し、お勧め図書の紹介をするなど生徒の読書量が増えるよう、サポートを厚くしていく。
	図書館活動の活性化	図書委員会活動を活発にし、図書館内の展示・掲示を毎月更新する。「図書館だより」の毎月の発行および、年3回発行の「図書館報」の内容充実を図る。	A	図書館内の展示・掲示は毎月の更新をほぼ達成している。本年度は、渡り廊下に新たに図書館情報の掲示コーナーを設けた。また、生徒端末で図書館の蔵書を検索できるシステムを導入した。「図書館だより」、「図書館報」発行についても努力している。	展示・掲示コーナーを更に充実させ、今まで図書館に来ていなかった生徒が図書館に来たくなるように、図書委員を中心に広報活動にも力を入れたい。「図書館だより」と「図書館報」を通じた広報活動は継続していく。また、来年度から「まなぼん」を足掛かりとして県立図書館と連携していく。
現職教育	校外研修の充実	他校への学校訪問と授業公開への参加を呼びかけ、積極的な参加を促す。さらにその報告会を実施することで、情報の共有を促す。	C	本年度も新型コロナウイルス感染症予防のため、多くの学校で学校訪問研修の人数制限や遠隔配信が行われた。積極的参加が躊躇される側面もあり、あまり積極的参加を促すことができなかった。	新型コロナ収束を願いつつ、他校への学校訪問研修及び授業公開への参加呼び掛けを行っていく。リモート配信される会議については、先生がたの空き時間で気軽に視聴できるような工夫もしていきたい。
	校内研修の充実	新しい学力観に基づき、主体的・対話的で深い学びができるよう校内研修内容の改善など研究に取り組む。校内研究授業、授業相互参観週間を効果的に生かし授業改善に努める。	B	授業公開に合わせ、年に2回授業相互参観週間を設けている。事後アンケートでは、この期間に研究授業を入れてほしいという要望があった。教科の校内研究授業は、計画した時期に実施できないことがあった。	授業公開及び相互授業参観期間と連動した教科研究授業の在り方については、管理職とも相談してより参観しやすい方向で見直していきたい。校内研修が有意義なものになるよう引き続き工夫していく。
PTA活動	PTA活動の充実	総務・文化・生活指導・保健厚生・進路指導の各委員会の理事を中心に意欲的に行われているPTA活動に、一般保護者が参加しやすい活動を模索(PTA総会参加率を20%以上)し、活動の活発化を図ることで、生徒にとってより良い教育環境を作ることを目指す。特に今年度はコロナウイルス感染症対策を行い、本来の東高PTA活動の特色を前面に押し出し充実を図る。	A	新型コロナウイルス感染症の影響が続く中、各委員会とも委員長・副委員長を中心に、意欲的、積極的に企画・活動を行った。また、役員を中心に充実した活動を実施できた。今年度はPTA総会も対面開催とし、以前の活発な状況を取り戻しつつある。	昨年度に比べ、通常の活動形態を取り戻しつつあるが、今年度も新型コロナウイルス感染症の影響は見られた。ただ、昨年度より今年度の活動は活発で、同様のPTA役員研修や文化祭・運動会での催しを来年度も継続したい。通常の活動形態が取り戻せた後は、従来からの課題である一般保護者が参加しやすい、より良い教育活動をさらに模索・展開していきたい。
		「明教通信」を年4回、「明教便り」を年12回発行、「ホームページ」を随時更新することにより、保護者に必要な情報を伝えるとともに、本校保護者の本校教育への興味を喚起したい。	B	新型コロナウイルス感染症の影響で行事が制限された中、各媒体とも、工夫して発行されており、年4回、年12回の発行を達成でき、保護者に生徒の活動予定、状況が的確に伝えることができた。	昨年度、本年度を良い機会とし、今後の在り方を検討することで、本校の魅力をより伝えることができるよう更なる内容の充実を図りたいと考えている。特にホームページの充実が最重要項目としてを検討したい。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。